



## 劇場型イノベーションの興しかた

「あのね。ギブ・アンド・テイクなんてコトバは、ウソやで。」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2025.3.6

おこげという名前の愛猫を昨年秋に失った。17年間を連れ添った。悲しみが癒えなくて、いまだ週3の頻度で落涙してしまう。彼の生前に弟分として購入したロシアンブルーのぬいぐるみ、わびすけを抱いて寝るようになったことは内緒だ。

当然おこげには、お兄さんである自覚はなかった。わびすけの匂いを注意深く嗅いだあと、「くしゅん」とだけ言って、どこかに行ってしまった。

思えば彼がいてくれたあいだずっと、彼を目で追うようになっていた。美術館で鑑賞するような、しんとする気持ちにさせてくれた。翡翠色の大きな瞳に吸い込まれてきた。

おこげの一挙手一投足を見届けたくて、僕は宿命的に巻き込まれてきたのだと思う。

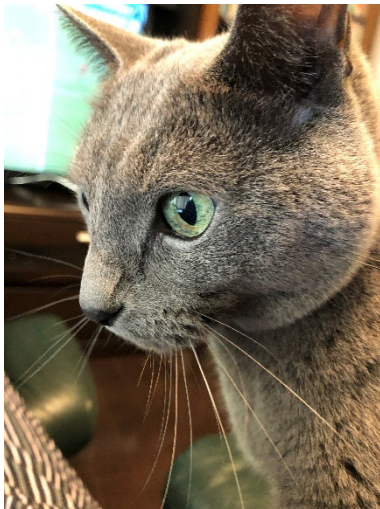


図1：傍らにたたずむ、翡翠色の瞳



図2：ぬいぐるみのおとうとぶん

今回は、「劇場型イノベーションを興すために欠かせない、他者の巻き込み方」について、僕の経験談でお伝えする。言い換えれば、「仕方ない、こいつが描くユメにいちよ乗っかってやるか」というステークホルダーをつくるための仕掛けだ。

その試みのタイトルは、「あのね。ギブ・アンド・テイクなんてコトバは、ウソやで。」

のっけから身も蓋もないことを言う奴だ、と思われたらどうか。今の時代、ココだけ切り取られて「人と人の繋がりを信じない、残念な自己中経営者。ついでに中二病」と悪評が立つかもしれない。だが僕自身が一步踏み出してみても、試行錯誤を重ねて辿り着いた境

地なので、その意図をお伝えする。

ギブ・アンド・テイク、すなわち「相互の利益を追求する交換行為」が、ビジネスや人間関係に重要であることは承知している。これを否定するつもりはない。問題は、そんなに爽やかなハナシではないということだ。たいていは最初にギブする数と質が、決定的に不足していると思っている。大きなヤマを動かす「文脈」が必要なのだ。

尤も、うちのおこげのように「無敵の可愛らしさ」で、僕の「価値交換基準を液状化」するような芸当ができれば別だが。少なくとも僕の周りの人間には、いない。

大きなヤマを動かす「文脈」とは何か。恋愛や商談において、意中の人の気持ちを掴むための仕掛けは、もっと泥臭いものだと思う。そこから物語が生まれるのだから、それなりの心持ちと、結果に邁進する惜しみない行動が必要になる。ちなみに僕の恋愛経験におけるギブギブ・アンド・ギブについては不問とする。むろん、黒歴史だ。

閑話休題。「文脈」に関して、僕なんかより数段も優れた表現を見つけた。尾原和啓さんによる2018年の著書、「どこでも誰とでも働ける」である。どの章を読んでも膝を打つものばかりだが、僕が大切にしている尾原さんの言葉を列記すると、こんな感じになる。

- ①プロフェッショナルの語源となった、「自分が何者であるか、何が出来て何ができないかを、自分の責任でプロフェス（公言）する」こと
- ②プロとして自分の名前で生きる勇気を持つこと、相手に説明責任を果たすこと
- ③ひたすら相手のためになることをギブし続けること

ところで僕は、友人らと一緒に2009年に「クロマトユーザー会」という国内の研究会を立ち上げた。今もその代表を務めている。過日を振り返ると、僕の試みが尾原さんの言葉①②③に似ていることに気づいた。もちろん尾原さんのような説得力のある表現は持ち合わせておらず、こころざしも随分低かったと思う。だが尾原さんの言葉に出逢った今、自分の直感を信じた当時の試行錯誤の意味をようやく理解できた気がする。

「クロマトユーザー会」を通じて生まれた物語がある。かけがえのない友人との出会いがあった。仮にTファーマ（当時）の、ティーウチさんとしておこう。

天才肌で、職人タイプのヒトだと認識している。一緒に会を立ち上げて以来、親交が深まった。たくさんの議論をして、たくさんの乾杯を交わした。そして僕があまり得意ではない質量分析について、親身になって教えてくれようとした。こんな言い方になるのは、結果が芳しくなかったからだ。正直、何を言っているのか、さっぱりわからなかった。僕の頭の出来が悪すぎたと、その時は随分と落ち込んだものだ。だがその後、あれは本当に僕の頭の問題だけか、というエピソードに何度か出くわすことになる。ティーウチさんの説明が独特過ぎて、「クロマトユーザー会」でも理解難民が続出した。

おそらく、けもの道を躊躇なく走り抜ける野生動物のように、ティーウチさんにはゴール到達までの道筋が見えているのだ。きっと言葉にするよりも、映像ではっきりと。

実際に彼は、他の熟練者が難渋するクロマト業務をスイスイとこなしてしまう。アニマル・ロジック。山田詠美さんの著書のタイトルこそが、ティーウチさんに相応しい。サイエンスの世界の住人でありながら、アートの才能で切り拓くヒトだと認識している。

業界でも有名人であるティーウチさんは、一見すると他者の施しなど不要に思える。しかし予想に反してクロマジーン設立直後、すぐに自ら声をかけてくれた。

「オレ、これまで三輪さんに受けた恩を返したいんだよ。三輪さんは今までずっと気前よく、知識や戦略とかみんなに授けてくれたよね。あれ全部、オレの宝物だよ。三輪さんの哲学と推進力は、うちの会社の求めることに合致すると思う。アア、ここからオレたちの希望に満ちた仕掛けが、またはじまるね。」

うっかり落涙しそうになって僕は、胸の内で般若心経を唱えた。

それからの結果は、当社のニュースリリースの通りだ。ティーウチさんは、自社の著しい成果に貢献したとされ、表彰を受けたと聞く。あの日、ギブ・アンド・リスクテイクしてくれたティーウチさんに、本当の意味でテイクが生まれたことに安堵した。

#### 劇場型イノベーションの興しかた

「あのね。ギブ・アンド・テイクなんてコトバは、ウソやで。」

感銘を受けた書籍

尾原和啓さん「どこでも誰とでも働ける」  
— 12の会社で学んだ“これから”の仕事と転職のルール

かけがえのない友人

Tファーマ（当時） ティーウチさん

#### ◆周囲を巻きこむ心得、その①

劇場型イノベーションには、自分の目指すゴールに賛同してくれるステークホルダーが必要。  
周囲を巻き込むためには、当然その本人の熱量や仕掛けが求められる。  
恋愛やビジネスにおいて、ギブ・アンド・テイクは、そんなカンタンに成立しない。  
ギブギブギブ、あたりまで頑張ってみて、はじめて相手に関心を持つ「本能の扉」が軽めに開く。  
それはもう、アニマル・ロジックと言えるような、本能同士の結びつきのように思える。  
そこから両者に思ってもみなかったテイクが生まれたら、ロマンティックが止まらない。



天才肌の友人には後日譚がある。ティーウチさんは、すっかり当社のメンバー達とも打ち解けた。ときどき食事会に参加してくれるようになった。そしてたいてい、満足げに同じことを語り始める。その際、男性社員の方角には目もくれないことは内緒だ。

「ウウ。オレはこうやって君達とサイエンスのハナシをするのが、一番好きなんだ。」

冒頭のウウ、って何よ。なんで今、ウウって言ったんだ。全員の頭から、そんな吹き出しが出ていることを、僕は見逃さない。

ちなみにうちのおこげが、「ウウ」と言うときはたいてい、「軽めのおねだり」をする時だ。そのおねだりを聞き届けると、「ぐるる」と機嫌よく喉を鳴らす運びとなる。



図3：「ウウ」（やい、俺を撫でろ）→「ぐるる」（すっかり満足）の流れ

アニマル・ロジック。僕は、おこげの「ぐるる」が聞きたくて、万障繰り合わせて巻き込まれてきた。相手の本能に突き刺さるような仕掛けが、周囲を巻き込む極意なんだろうと思う。普段の丹念な毛づくろい、あるいは折れない心で一步を踏み出すほかない。

当社の女性社員に囲まれて満足げに語るティーウチさんが、そのうち「ぐるる」と言い出すんじゃないかと睨んでいる。ところで彼の「軽めのおねだり」って、何だろう。

【了】